

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
令和3年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「職場における孤独・孤立化過程の分析—総合的予防プログラム
の開発に向けて—」

松井 豊
(筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員)

目次

1. 研究開発プロジェクト名.....	2
2. 研究開発実施の具体的内容.....	2
2 - 1. 研究開発目標.....	2
2 - 2. 実施内容・結果.....	3
2 - 3. 会議等の活動.....	9
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況.....	10
4. 研究開発実施体制.....	11
5. 研究開発実施者.....	12
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	15
6 - 1. シンポジウム等.....	15
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	15
6 - 3. 論文発表.....	15
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	16
6 - 5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	16
6 - 6. 知財出願.....	16

1. 研究開発プロジェクト名

職場における孤独・孤立化過程の分析—総合的予防プログラムの開発に向けて—

2. 研究開発実施の具体的内容

2 - 1. 研究開発目標

本プロジェクトは、働く人の職場内の孤独化・孤立化に焦点を当てて、その予防のためのツール開発を目的とする。職場内孤立の状態を把握するために、4つの指標を測定するツールを開発する。4つの指標とは、孤立・孤独の主観的指標、予防チャート、FIL-qIAT（孤立・孤独を表す文章を刺激とする潜在連合テスト）、孤独検出ストループ課題（色のついた言葉の色を回答する課題）である。これらの指標を1ヶ月に1回の頻度でスマートフォンなどで測定し、孤独化・孤立化の兆候が見られたら、セルフケアや上司による支援、専門家による支援などを実施するプログラムを開発することが目標である。

（1）スモールスタート期間終了時

スモールスタート期間には、以下の3つの目標の達成を目指す。第1は、上記4つの指標を測定するツールの作成と、その指標の妥当性の確認である。第2は、これらの指標の分析を通して、コロナ禍による職場の変化、とくにテレワークが、職場内の孤立・孤独にどのように影響しているかを明らかにする。第3に、本格研究開発期に調査の協力を得る企業との準備調整を行う。

（2）本格研究開発期間終了時

本格研究開発期間には、以下の4つの目標の達成を目指す。第1は、操作性のよいアプリの開発である。第2は、開発されたアプリを用いたウェブパネル調査により、孤独・孤立の関連要因を検討することである。第3は、同アプリを用いて孤独・孤立の状態を測定した後に、回答者にフィードバックすることによる孤独・孤立の緩和効果の検証である。以上の検討により、開発されたプログラムの有効性が確認される。第4は、研究成果の発表と、開発されたプログラムの利用方法の講習会を開催し、開発されたプログラムの広報を行う。

2 - 2. 実施内容・結果

(1) スケジュール

実施項目	初年度 (2021年11月 ~2022年3月)	2年度 (2022年4月 ~2023年3月)		実施項目	3年度 (2023年4月 ~2024年3月)	4年度 (2024年4月 ~2025年3月)	最終年度 (2025年4月 ~2026年3月)
項目1 主観的指標の開発	予備調査	主観的指標の作成と回答プログラム作成 個人要因・組織要因・社会的資源との関係調査	主観的指標・FIL-qIAT・孤独検出ストループ・予防チャートのアプリ開発準備完成 ステージゲート評価	項目6 アプリの開発と検証	アプリの開発 ◆マイルストーン②	アプリの有効性検証	
項目3 FIL-qIATの開発	連合指標による孤独感測定方法としてのq-IATの開発	親和欲求および孤立状況の測定に関するFIL-qIATの妥当性の検討		項目7 孤独・孤立関連要因		孤独・孤立関連要因検討	
項目4 孤独検出ストループの開発	潜在的な孤独感のレベルを測定するストループ課題の開発	潜在的な孤独感のレベルを測定するストループ課題の完成		項目8 孤立・孤独状態のフィードバック効果検討		フィードバック方法検討 フィードバック効果検証実験	
項目2 予防チャートの開発	予備調査・予防チャートの開発	予防チャートの完成 新入社員への介入調査 ◆マイルストーン①		項目9 アプリの予防的介入の試み		フィードバック方法検討 フィードバック効果検証実験	
項目5 調整グループ	協力調整・依頼予備調査(項目7,8)	現場との連携準備			協力企業との連携		企業へのフィードバック
項目10 研究成果発表		国際・国内学会発表				国際・国内学会発表	プログラムの普及活動

スモールスタート期間

本格研究開発期間 ※ステージゲート評価通過の場合

(2) 各実施内容

当該年度の到達点 1

(目標) 本プロジェクトの実施にあたり、協力企業との連携・調整を行う。

企業との調整・協力依頼 (調整グループ)

実施項目 1 - ①: 企業との調整・協力依頼

実施内容:

センターとの関わりの合った企業14社および調整グループサブリーダー御手洗の紹介で、中小企業6社へ、研究協力を依頼した。その結果、19社から協力の回答を頂いた。これら19社に、実施項目 2 - ①の面接調査を実施し、19社の内11社に実施項目 3 - ①の予防チャートの予備調査を実施した。

期間: 令和3年11月～令和4年3月

実施者: 岡田昌毅 (筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 教授・センター長) 御手洗尚樹 (筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 客員教授) 太田彩子 (筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 客員研究員) 森理字子 (共立女子大学 専任講師) 松井豊 (筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員)

対象: 企業人事担当者 代表取締役社長

実施項目 1 - ②: 本格研究開発期間における研究協力の在り方調整

実施内容:

実施項目 1 - ①で協力を頂いた19社に、令和4年度の研究協力を打診している。

実施者: 岡田昌毅 (筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 教授・センター長) 御手洗尚樹 (筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 客員教授) 太田彩子 (筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 客員研究員) 森理字子 (共立女子大学 専任講師) 松井豊 (筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員)

対象: 企業人事担当者 代表取締役社長

当該年度の到達点 2

(目標) 孤独・孤立における心理状態を把握する主観的指標を開発する。

実施項目 2 - ①: 企業従業員への面接調査の実施

実施内容:

「社会的孤立」「孤独感」および職場内不適応に影響する要因や心理状態を把握する主要な測定変数 (主観的指標) を検討するため面接調査を実施。

期間: 令和4年2月～令和4年3月

実施者: 中村准子 (筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員) 尾野裕美 (明星大学 准教授) 関谷大輝 (東京成徳大学 准教授) 佐藤藍 (放送大学 客員准教授) 桃谷裕子 (独立行政法

人労働者健康安全機構 臨床心理士)
対象：企業人事部の従業員（15社）

当該年度の到達点 3

（目標）予備調査と新入社員への介入調査を通し社会的孤独に関する予防チャートの開発を行う。

実施項目 3 - ①：予備調査・予防チャートの開発

実施内容：

「入社から現在までの孤立感や孤独感を感じた経験」をテーマとする「予防チャート」を開発する。回答者の孤立・孤独に関する気づきを促し、孤立を緩和させる介入ツールになると期待される。企業への協力依頼は、調整グループと協働であった。

期間：令和4年2月～令和4年3月

実施者：須藤章（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員）高橋南海子（明星大学明星教育センター 特任教授）羽生琢哉（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員）原恵子（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 准教授）

対象：①入社2年目社員（コロナ禍においてテレワークなど従来とは異なる働き方で職業生活をスタートした者を含む）②入社3年目社員（入社時から1年間は、コロナ禍の影響を受けていない者）

当該年度の到達点 4

（目標）職場における孤独・孤立の影響要因・フィードバックのあり方についての予備的調査として、企業人事担当者への面接を行う。

実施項目 4 - ①：職場における孤独・孤立の影響要因とフィードバックの在り方検討

実施内容：

今年度は、協力企業にさまざまな「職場」の状態について面接調査し、「職場」によって、どのような要因が孤立・孤独に影響しているかを検討した。企業への協力依頼は、予防チャート開発グループと協働であった。

実施者：岡田昌毅（筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 教授・センター長）御手洗尚樹（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 客員教授）太田彩子（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 客員研究員）森理宇子（共立女子大学 専任講師）松井豊（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員）

対象：企業人事担当者 代表取締役社長

当該年度の到達点 5

（目標）連合指標による孤独感測定方法としてのFIL-qIATの開発を行う。

実施項目 5 - ①：第1予備調査実施

実施内容：

今年度は、「社会人の孤独」を潜在的レベルから、かつ親和欲求と孤立状況の不一致という観点から測定するFIL-qIATの開発に向けての予備調査を実施することを目的とした。まず第1予備調査として、社会人が感じる親和欲求・孤立状況の2側面について広く尋ねる探索的調査を実施した。

実施者：藤桂（筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 准教授）登藤直弥（筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 助教）遠藤寛子（埼玉学園大学 准教授）永野惣一（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員）丸山淳市（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 客員研究員）中村星斗（（株）リクルートマネジメントソリューションズ 職員）

対象：ウェブ調査会社の社会人モニター400名

実施項目5 - ②：第2予備調査実施

実施内容：

FIL-qIATの開発に向けての第2予備調査として、第1予備調査の結果に基づいて作成された、社会人における親和欲求・孤立状況の2側面の項目について調査を行い、項目反応理論に基づく項目特性の分析ならびに妥当性の検証のための調査を実施した。

実施者：藤桂（筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 准教授）登藤直弥（筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 助教）遠藤寛子（埼玉学園大学 准教授）永野惣一（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員）丸山淳市（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 客員研究員）中村星斗（（株）リクルートマネジメントソリューションズ 職員）

対象：ウェブ調査会社の社会人モニター1000名

当該年度の到達点6

（目標）潜在的な孤独感のレベルを測定するストループ課題の開発を行う。

実施項目6 - ①：第1調査実施のための準備

実施内容：

孤独検出ストループ課題に使用する社会的にネガティブな単語を検討するため、孤独と関連すると考えられる単語を国立国語研究所『分類語彙表増補改訂版データベース』（ver.1.0）から抽出した。

実施者：大塚泰正（筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 准教授）三好きよみ（東京都立産業技術大学院大学 教授）

実施項目6 - ②：第1調査の実施と分析

実施内容：

6 - ①で抽出した項目による質問紙調査を実施し、結果をもとに孤独検出ストループ課題に使用する孤独に関連する単語を抽出する。

実施者：大塚泰正（筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 准教授）三好きよみ（東京都立産業技術大学院大学 教授）

（3）成果

当該年度の到達点 1

（目標）本プロジェクトの実施にあたり、協力企業との連携・調整を行う。企業との調整・協力依頼。

実施項目 1 - ①：企業との調整・協力依頼

成果：

企業19社から研究協力の許可が得られ、実施項目の2-①、3-①が実施された。

実施項目 1 - ②：本格研究開発期間における研究協力の在り方調整

成果：

本格研究開発期間における研究協力の在り方調整打診は終了し、一部企業からは協力承諾を得ている。

当該年度の到達点 2

（目標）孤独・孤立における心理状態を把握する主観的指標を開発する。

実施項目 2 - ①：企業従業員への面接調査の実施

成果：

15社19名の企業人事担当者への面接調査を実施した。面接調査結果と先行研究の知見をもとに、職場の孤立・孤独の概念を整理し、職場の孤独感を測定する主観的指標の尺度案（質問項目）を作成した。また、職場の孤独感に関連する要因を検討した。これらの検討した変数を使用し、次年度に、企業従業員へのウェブ調査を実施する。

当該年度の到達点 3

（目標）予備調査と新入社員への介入調査を通し社会的孤独に関する予防チャートの開発を行う。

実施項目 3 - ①：予備調査・予防チャートの開発

成果：

11社25名から、「予防チャート（調査上はラインチャートと表記）」記入に協力を得られた。そのうちの20人（大企業・中小企業が10人ずつになるように構成）には、予防チャートに基づいた面接調査を実施した。現在は、面接データの整理と質的分析を進めている。一定の整理が進んでいるが、非公開データのため掲載できない。ただし、職場内での孤立・孤独に至る要因やパターン、孤立・孤独感を緩和する要因、予防チャートの運用法に関する整理が進んでいる。主な結果に関しては、8～9月の国内心理学系学会にて発表予定である。

当該年度の到達点 4

（目標）職場における孤独・孤立の影響要因・フィードバックの在り方についての

予備的調査として、企業人事担当者への面接を行う。

実施項目4 - ①：職場における孤独・孤立の影響要因とフィードバックの在り方検討

成果：

15社19名の面接調査を実施した。現在は、回答を分析しており、一定の成果を得ているが、非公開データのため掲載できない。ただし、大企業と中小企業とでは、職場内孤独孤立の捉え方と対策が異なっていることが明らかになった。

当該年度の到達点5

(目標) 連合指標による孤独感測定方法としてのFIL-qIATの開発を行う。

実施項目5 - ①：第1予備調査実施

成果：

実施項目5 - ①である第1予備調査からは、社会人を取り巻く親和・孤立・孤独に関する現状について分析を行い、主として、次の3点を明らかにした。(1) 職場における社会人の孤独に関しては、肯定率がかなり低く(親和欲求・孤立状況と比しても低く)、直接的な測定方法のみならず、間接的・非意識的・潜在的レベルでの測定を行うことの重要性が示唆された。(2) また、親和欲求を抱きつつも、その欲求が充足されず孤立を認知している者が全体の約4割に上っており、本グループが目的とする「親和欲求と孤立状況の不一致」という観点からの測定を行うことの重要性が示唆された。(3) さらに、職場における社会人が抱く親和欲求および孤立状況を精査・分類し、両者を測定するための項目作成の準備を進めることができた。

実施項目5 - ②：第2予備調査実施

成果：

実施項目5 - ②である第2予備調査からは、社会人における親和欲求および孤立状況についての大規模な回答データを収集することができた。また、親和欲求ならびに孤立状況について一定の妥当性をもって測定することのできる項目群を開発することができた。

当該年度の到達点6

(目標) 潜在的な孤独感のレベルを測定するストループ課題の開発を行う。

実施項目6 - ①：第1調査実施のための準備

成果：

国立国語研究所『分類語彙表増補改訂版データベース』(ver. 1.0)から、孤独と関連が強いと考えられる単語から、関連が弱いと考えられる単語まで、合計240語を抽出し、第1調査に用いる材料として準備した。

実施項目6 - ②：第1調査の実施と分析

成果：

ウェブ調査会社の社会人モニター205名を対象に令和4年2~3月にウェ

ブ調査を実施した。現在は、回答を分析しており、一定の成果を得ているが、非公開データのため現時点では詳細な結果については掲載することができない。

(4) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

各グループの活動はほぼ順調に進行し、各達成目標をほぼ達成した。ただし、達成目標2-①と3-①は、年度末ギリギリまで面接調査を行った関係で、逐語録の作成やその解析が令和4年度に繰り越しとなった。また、実施項目6-②に関しては、追加調査の必要性が明らかになった。

得られた結果の多くは、まだ未発表のため記述することができないが、令和4年度に関連学会で順次発表する計画である。記述できる結果としては、①企業人事担当者は、職場内孤立事例をあげられたが、「職場内孤立・孤独」という問題意識は、企業によって分散が見られた(到達点3)。②職場内孤立・孤独の捉え方は、企業規模によって異なっていた(到達点4)。③社会人は、自身の「孤立・孤独」を自覚していない傾向が見られた(到達点5)。

令和4年度の課題は(実施項目6-②の追加調査を除き)当初計画通りに進行する。実施項目6-②の追加調査は令和4年度に実施する。

2-3. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2021/11/16	調整グループ会議1	オンライン	同グループの研究計画に関する議論
2021/11/20	主観的指標グループ1	オンライン	同グループの研究計画、及び組織における孤立・孤独感に関連する要因に関する議論。
2021/11/26	FIL-qIAT グループ会議1	オンライン	同グループの研究計画・実施体制に関する議論
2021/11/29	調整グループ会議2	オンライン	面接調査依頼状・項目などの検討
2021/12/1	孤独ストループグループ会議1	筑波大学文 教校舎	本年度の研究の進め方について
2021/12/2	調整グループ会議3	オンライン	面接調査の方法に関する検討
2021/12/9	調整グループ会議4	オンライン	面接調査の対象企業に関する検討
2021/12/24	主観的指標グループ2	オンライン	面接項目の検討。職場の孤独感及び孤独感と類似・対極する概念の検討。
2022/1/5	FIL-qIAT グループ会議2	オンライン	第1予備調査の実施計画などの検討
2022/1/5	孤独ストループグループ会議2	筑波大学文 教校舎	ウェブ調査に使用する単語の選定

2022/1/6	主観的指標グループ3	オンライン	次年度実施の第1調査(ウェブ調査)の質問構成、予算、及びスケジュールの検討。
2022/1/22	主観的指標グループ4	オンライン	職場の孤独感に関連する要因、尺度の検討
2022/1/27	調整グループ会議5	オンライン	面接調査の進捗状況と課題の検討
2022/1/28	予防チャートグループ会議1	オンライン	プロジェクト全体に対する情報共有。研究計画・方法に関する議論。
2022/1/28	FIL-qIAT グループ会議3	オンライン	第1予備調査の実施内容・聴取項目などの検討
2022/2/4	主観的指標グループ5	オンライン	既存の孤独感尺度に関する検討
2022/2/4	FIL-qIAT グループ会議4	オンライン	第1予備調査のデータシェアリング・分析実施体制の検討
2022/2/14	FIL-qIAT グループ会議5	オンライン	第2予備調査の実施計画などの検討
2022/2/25	主観的指標グループ6	オンライン	職場の孤独感を構成する概念に関する検討
2022/2/25	調整グループ会議6	オンライン	面接調査の結果に関する議論
2022/3/11	主観的指標グループ7	オンライン	職場の孤独感尺度(主観的指標)の概念整理と質問項目案の検討
2022/3/13	FIL-qIAT グループ会議6	オンライン	第2予備調査の実施内容・聴取項目などの検討、新規計画案に向けての意見交換
2022/3/16	孤独ストグループ会議3	筑波大学文 教校舎	次年度の実験に使用する単語の選定
2022/3/18	調整グループ会議7	オンライン	全体会提出資料の検討など
2022/3/25	主観的指標グループ8	オンライン	職場の孤独感尺度(主観的指標)の質問文、教示文の検討。次年度実施の第1調査の計画。
2022/2~3月	予防チャートグループ内討議	SNS ツール	面接調査依頼状などの情報共有、進捗報告

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

現在は開始4か月後にあたり基礎研究を行っている段階であるが、いずれも順調に進展しており、今年度から来年度にかけて活用したツールの活用展開が期待できる。また、各

グループにおいて学会発表の準備が進展している。

4. 研究開発実施体制

(1) 全体統括

① 松井 豊 (筑波大学 働く人への心理支援開発センター 研究員)

② 実施項目：本プロジェクト全体の統括管理

グループの役割の説明：スモールスタート期間においては、プロジェクト全体の進行管理、各グループ活動の調整、情報共有を行う。

実施項目：アプリケーション作成の統括

グループの役割の説明：本格研究開発期には、上記の他、各グループで開発した測定指標を一つのアプリケーションにまとめる際の統括を行う。

(2) 主観的指標グループ

① 中村 准子 (筑波大学 働く人への心理支援開発センター 研究員)

② 実施項目：スモールスタート期には、孤独・孤立における心理状態を把握する主観的指標を開発する。本格研究開発期には、指標を絞り込み、スマートフォンで回答するアプリを開発、有効性の検証、フィードバックの効果検証の試みを行う。

グループの役割の説明：孤独・孤立に対する主観的な側面からのアプローチを検討するグループとして位置付く。スモールスタート期には、予防チャートグループと連携し、主観的指標に関する情報交換を行う。本格研究開発期には、他のグループと共に一体化したアプリの開発、有効性の検証、フィードバックの効果検証の試みを行う。

(3) 予防チャートグループ

① 原 恵子 (筑波大学 働く人への心理支援開発センター 准教授)

② 実施項目：スモールスタート期には、予備調査と新入社員への介入調査を通し社会的孤独に関する予防チャートの開発を行う。本格研究開発期には、開発された予防チャートを様々な集団へ展開する介入調査を通して支援用ツールとして整備し、研修会を実施するなど社会実装を進める。

グループの役割の説明：社会的孤立・孤独に対する主観的な側面からのアプローチを検討するグループとして位置付く。スモールスタート期には、主観的指標開発グループと連携し、主観的指標に関する情報交換を行う。本格研究開発期には、他のグループと共に一体化したアプリの開発、フィードバックの効果検証の試みを行う。最終的には、人事・支援者などが使用できるツールとして整備するなど社会実装にも貢献する。

(4) FIL-qIATグループ

① 藤 桂 (筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発研究センター 准教授)

② 実施項目：スモールスタート期には、連合指標による孤独感測定方法としてのFIL-qIATの開発を行う。本格研究開発期間には、スマートフォンで回答するアプ

リを開発、有効性の検証、予防的介入の試みを行う。

グループの役割の説明：孤独・孤立に対する非主観的な側面からのアプローチを検討するグループとして位置付く。スモールスタート期には、孤独ストループ開発グループと非主観的指標に関する情報交換を行う。本格研究開発期には、他のグループと共に一体化したアプリの開発、有効性の検証、フィードバックの効果検証の試みを行う。

(5) 孤独ストループ開発グループ

- ① 大塚 泰正 (筑波大学 人間系・働く人への働く人への心理支援開発研究センター 准教授)
- ② 実施項目：スモールスタート期には、潜在的な孤独感のレベルを測定するストループ課題の開発を行う。本格研究開発期間には、スマートフォンで回答するアプリを開発、有効性の検証、予防的介入の試みを行う。

グループの役割の説明：孤独に対する非主観的な側面からのアプローチを検討するグループとして位置付く。スモールスタート期には、FIL-qIATグループと非主観的指標に関する情報交換を行う。本格研究開発期には、他のグループと共に一体化したアプリの開発、有効性の検証、フィードバックの効果検証の試みを行う。

(6) 調整グループ

- ① 岡田 昌毅 (筑波大学 人間系・働く人への心理支援開発センター 教授・センター長)
- ② 実施項目：スモールスタート期には、本プロジェクトの実施にあたり、協力企業との連携・調整を行う。とくにデータの管理や倫理的な課題の解決にあたる。また、職場における孤独・孤立の影響要因・フィードバックのあり方についての予備的調査として、企業人為担当者への面接を行う。本格研究開発期には、データ管理、企業からの要望への処理、研究結果の企業へのフィードバックなどを担う。

グループの役割の説明：スモールスタート期には、各グループが開発中のツール案を協力企業に提示し、実施可能な形態などの調整を行う。本格研究開発期には、各グループと協力企業との情報交換や実施運営の調整にあたる。

5. 研究開発実施者

統括グループ (リーダー氏名：松井 豊)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
松井 豊	マツイ ユタ カ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	研究員

永野 惣一	ナガノ ソウ イチ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	研究員
-------	--------------	------	-------------------	-----

主観的指標開発グループ（リーダー氏名：中村 准子）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
中村 准子	ナカムラ ジ ユンコ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	研究員
尾野 裕美	オノ ヒロミ	明星大学	心理学部心理学科	准教授
関谷 大輝	セキヤ ダイ キ	東京成徳大学	応用心理学部福祉心理学科	准教授
佐藤 藍	サトウ アイ	放送大学		客員准教授
桃谷 裕子	モモタニ ヒ ロコ	独立行政法人労働者健康安全機構	横浜労災病院	臨床心理士

予防チャート開発グループ（リーダー氏名：原 恵子）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
原 恵子	ハラ ケイコ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	准教授
高橋 南海子	タカハシ ナ ミコ	明星大学	明星教育センター	特任教授
須藤 章	スドウ アキ ラ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	研究員
羽生 琢哉	ハニユウ タ クヤ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	研究員

FIL-qIAT開発グループ（リーダー氏名：藤 桂）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)

藤 桂	フジ ケイ	筑波大学	人間系・働く人への心理支援開発研究センター	准教授
遠藤 寛子	エンドウ ヒロコ	埼玉学園大学	人間学部心理学科	准教授
登藤 直弥	トウドウ ナオヤ	筑波大学	人間系	助教
中村 星斗	ナカムラ セイト	(株)リクルートマネジメントソリューションズ		職員
永野 惣一	ナガノ ソウイチ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	研究員
丸山 淳市	マルヤマ ジュンイチ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	客員研究員

孤独ストループ開発グループ (リーダー氏名: 大塚 泰正)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
大塚 泰正	オオツカ ヤスマサ	筑波大学	人間系・働く人への心理支援開発研究センター	准教授
三好 きよみ	ミヨシ キヨミ	東京都立産業技術大学院大学	産業技術研究科	教授

調整グループ (リーダー氏名: 岡田 昌毅)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
岡田 昌毅	オカダ マサキ	筑波大学	人間系・働く人への心理支援開発研究センター	教授・センター長

松井 豊	マツイ ユタカ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	研究員
御手洗 尚樹	ミタライ ナオキ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	客員教授
須藤 章	スドウ アキラ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	研究員
太田 彩子	オオタ アヤコ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	客員研究員
原 恵子	ハラ ケイコ	筑波大学	働く人への心理支援開発研究センター	准教授
森 理宇子	モリ リウコ	共立女子大学	ビジネス学部	専任講師

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

開催していない。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

・なし

(2) ウェブメディアの開設・運営

・検討中

(3) 学会(6-4.参照)以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

・なし

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (0 件)

●国内誌 (0 件)

●国際誌 (0 件)

(2) 査読なし (0 件)

6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(2) 口頭発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(3) ポスター発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (0 件)

(2) 受賞 (0 件)

(3) その他 (0 件)

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)